

第三章 二度の落選を乗り越えて

総選挙に出馬

終戦の翌年、昭和二十一年三月二十八日、森山は外務省を退官（依願免官）した。翌四月十日投票の戦後第一回の総選挙に栃木県から出馬するためだ。

敗戦からわずか七か月余りで第一回の総選挙が行なわれたわけだが、そこに至る経過は糺余曲折をたどった。

昭和二十年十一月二十六日に召集された第八十九臨時帝国議会は十二月十五日、政府から提出されていた衆議院議員選挙法改正案を成立（同十七日公布）させたあと、同十八日に解散した。翌十九日、政府は閣議で総選挙を二十一年の一月二十一日か二十二日に施行する方針を決定した。ところが二十日になって突如、GHQから総選挙の期日を当面、延期するよう指令が発せられる。これはGHQが事前に「不適任者」の公職追放を行うためで、年明け早々の一月四日、大々的な公

職追放が行われた。

GHQが二十一年三月十五日以降の総選挙施行を認可したのは、二十一年の一月二十二日になつてからのことだった。

これを受け、政府はようやく、四月十日総選挙を決めた。選挙法の改正で婦人参政権を含めて選挙権、被選挙権が大幅に拡大されることともに、選挙運動に対する規制も緩和された。この結果、婦人候補者、婦人議員の大量進出をはじめ、話題の人物、一人一党の珍妙な候補者が大量に立候補するなど、さまざまなエピソードを残した選挙となつた。

政界入りを腹に決めていた森山は、すでに前年から出馬の準備を進めていた。しかし、まつたくの初体験。情熱だけはだれにも負けないものを持っていたが、新たな経験にとまどうことも少なくなかつた。

「若氣の至りではありました、もちろん大まじめで選挙に出たのです。そのときは、『俺に投票しないやつは馬鹿だ』くらいのことを思つてましたよ。しかし、実際に選挙区へ行ってみると、親父の出身地とはいえそれまでまったくなじみのない土地でしょう。畑の向うのほうに農家がボツンボツンと点在している光景を目にした時には、いったいどうすれば票がとれるんだろう、という気持になりましたね」

森山が外務省にもどった当時、外務省には仕事で使う車もほとんどない状況だった。そこで森山は軍需省にいた頃のコネクションを使って、軍関係で保持していたオートバイ「陸王」のサイドカ

一を五、六十台、外務省のために調達してやつたことがある。

それを恩に着せたわけでもないが、森山はそのうちの一台を借り受けて栃木へひた走った。リアの泥よけに「外務省」の白い文字がくつきりと告印してある「陸王」で、選挙区巡りをしたわけだ。今のご時世なら大騒ぎになるところである。

「僕は外交官だったでしょ。だから、外交官という官職を投げうて選挙に出たという点で支持者たちは評価してくれました。しかし、僕は栃木県との関係は親父の出身地ということだけ。地元の学校も出ていないんだから、とにかく理屈だけでしたよ」

森山の選挙は最初から最後まで変わらなかつた。直接地元の人たちの利益に結びつくような話で票をかき集めるようなことはせず、外交、労働問題など国家的な課題について、原理、原則を真っ向から主張していく。

ある意味では地元民に媚びない選挙だが、「橋だ」「道路だ」と利益誘導する候補に比べれば圧倒的に不利だ。もちろん、森山が地元の仕事をしていないわけではないわけではない。それどころか過去の実績を詳細に点検してみると、並みの政治家など足元にも及ばないほど地元の仕事をしてきた。だが森山が地元の仕事をやる場合、それは単なる利益誘導、票目当てのご機嫌とりではなかつた。自分自身の主義主張、原理原則に照らし合わせて正しいと思うことならば、それこそ全力でやってのけたのである。しかし森山は自分の功績を誇大に宣伝することをいさぎよしとしない、というか照れていえない性格だつた。またときに、天下、国家について熱弁をふるうあまり、演説会で肝心の「よろしくおねがいします」を忘れることがあつた。

この最初の選挙でも森山は、オンボロ・トラックの上から、今後の日本はどうなるのか、国際社会の中で生き残るためにどうすべきかを説き、そのためには外交官出身の人間、つまり自分のような政治家が必要であることを訴えた。

森山の選挙は金を使わないことで定評がある。第一回の選挙では、選挙資金らしき金は、父親からもらった三万円だけ。四十年前でもこの程度の金では焼け石に水のようなもの、中盤以降は小遣い錢にも苦労しながら、なんとか投票日までこぎつけた。

選挙にあまり金を使わないのは、金集めが下手というよりも「使うべきでない」という信条による。それだけに、森山は金権体質には非常に厳しい批判の目を注いでいた。

「選挙に金をかけるべきじゃないし、かけなくてもできるのです。たとえばいま、栃木県では県会議員の選挙で当選した人のうち、半分以上が僕より選挙に資金を使つてますよ。僕は国会、あちらは県会なのにね。もちろんまったく使わないわけじゃないが、つましくやつています。選挙に金をかけるから、その金をどこかで無理して集めてくるという金権体質を助長するのです」

もともと天下、國家を掲げて選挙に出た森山だが、その支持者もいわば同郷の士が多い。選挙になると、それ相当の金を渡さなければ運動をしない、というのが今日の選挙の一般的なパターンだが、森山の場合は同郷の士だから、金は必要最小限で済む。森山の性格がそうした支持者たちを集めただが、毎回、選挙のたびに多額の資金をつき込む政治家から見ると、うらやましい限りだろ

う。

「第一回目の出馬のときでしたか、鹿沼の近郊のある村に行つたのです。立ち会い演説会が終つて、ひと休みしていると、この村一番の有力者がやってきましたね。その人はそれまで、僕の支持者じゃなく、ほかの候補者を応援していたのですが、僕の演説を聞いて興味を持つてくれたらしく『今回落ちてもまたやるか?』と聞いてきた。僕は当然、受かるつもりでやってましたから『落ちるなんてとんでもない。絶対当選しますよ』というと、『万一落ちても必ず続けてやるか』って念をおすんだ。で、『もちろん』と答えると、『よし、それじゃ、応援してやろう』といつてくれた。そして、その地域については、全ての費用を自分持ちでビラ張りから集会のセットから、みんなやてくれたのです。こういうありがたいこともありますね」

森山と支持者とのつながりは力でもなければ利権でもない。心と心でつながっている。それだけに、この『絆』の強さは半可なものではない。これは初期のころから変わらない。

森山後援会総連合会の初代青年部長で宇都宮市議会議員の入江陳夫がいう。

「先生とは昭和二十七年十月の選挙で事務所を訪ねて握手したのが最初です。当時選挙になると、新部傳三郎、大山幸雄、後藤延雄、相場一郎といった人達が事務所につめ采配を振っていました。この人達は『森山四天王』と呼ばれ、同志はもちろん他の陣営からも畏敬の念で見られていました。四天王のお一人、新部さんは晩年病気がちで自宅療養していましたが、ベッドの上の天井に先生の選挙用ポスターを貼り、朝、日が覚めると『先生おはようございます』。夜やすまれる時には部さんを見舞つたと聞きました」

同期生の強い応援

「こうした支持者たちに恵まれて、森山は最後まであまり金の苦労をしないまま、政治家の道を歩んでこられた。

現在、栃木県は一区と二区に分かれているが、第一回選挙当時は全県一区で定員十名。立候補者は、『チーム』ともいえる雰囲気の中で六十人近くに及んだ。

徐々に支持者が増えはじめたとはいえ、もともと、いわば無手勝流で選挙に飛び込んだ森山だけに、情勢は厳しかった。その中で森山を大いに元気づけたのが、外務省の同期生たちの応援だった。

「僕の外務省での同期生は二十人ぐらい。その中の何人が応援にきてくれました。心臓の強いのも弱いのもいましてね。平原君（前駐英國大使・平原毅氏）なんか強いほうだった。彼は応援演説で『私は外務ジカンの平原であります』と、外務事務官の『ム』をサイレントしちゃつてね。聞いてるみんなは『ほう。若いのに次官か』。その次官がわざわざ応援にきてるんだから、森山も相当な

人物に違いない』なんて感心されたものです。大笑いだったね』

その『心臓の強い』平原は、当時の思い出を、こう語っている。

「いま、国家公務員は選挙演説や応援をしてはいけないことになつてますが、あの頃は、不思議なことに『やれ、とまではいわないが、やつてはいけない』という規制も特になかつたのです。またま第一回の選挙に森山君が打つて出ることになつたので、期せずして、同期の仲間で『大いに後押ししよう』ということになりましてね。そのころは外務省も暇だつたんですよ。ことに僕は条約局にいたのですが、いまの条約局というと国会その他で忙しいけれども、当時は占領の先例を調べるといった程度の仕事しかなかつた。課長なんかも理解があつて、『おまえたちの同期が選挙に出るそういうじゃないか。ひとつ、暇をやるから応援にいってやれ』というわけで……」

この時平原を含む同期生六、七人が栃木県まで応援に駆けつけたという。国全体が大混乱から抜け出しておらず、確たるルールも定着していない時代を物語るエピソードだ。平原が、この時のことをもつとも印象に残っているのは『旅館のドテラ』だという。

「あれは四月でしたね。僕は外地から帰ってきたばかり。住居も関東大震災のとき、アメリカが贈つてくれたという横浜の一DKのボロボロのプレハブだつたし、オーバーコートも持つていない。東京では桜が咲いて、もう春だつたんで、オーバーなんかいらないやと思つて宇都宮に着くと、あそこは寒いんですよ。『僕はなにをすればいいんだ』というと『トラックに乗つて選挙区を応援演説して歩いてくれ』でしょ。僕は声が大きいものですから、スピーカーなんかなくても大丈夫。だ

けど、トラックの荷台に乗つて寒風に吹かれていると、我慢ができないほど猛烈に寒い。そこで、旅館のドテラを背広の上に着ましてね。奇妙な格好ですよ。そういうスタイルで、『これから日本は国際化する。今後の政治家は世界をよく知らなければいけない。森山君は外交官出身で最適任者だ』というようなことをしゃべつて歩きました。ところが栃木から戻つて一晩寝ましてね、朝起きたら全く声が出なくなつてたんですよ。あんまり大きな声を出したからでしょうが、軍隊でもずいぶん大きな声を出してたのに、こんなことはなかつた。張り切りすぎたのですね』

こうした平原たち友人の懸命な応援にもかかわらず、残念ながら森山は五十八人中十八位で落選する。とはいゝ、まったく無名の新人で、地盤、看板、カバンいすれもなかつたにもかかわらず、二万二千三百九十票を獲得した。かなりの善戦だったといつていい。

落選した森山は翌二十二年四月、結成されたばかりの民主党に入党した。

民主党を選んだ理由は、

「僕の親父は鳩山門下生の弁護士だつたでしょ。だからはじめは自由党に入ろうと思ったのです。ところが鳩山先生がページになつてしまつたために、自由党の幹部の一人だつた芦田均さんが民主党を結成したのに従つて民主党に入つたのです」

保守党の動向

ところで、当時の保守政党の動向について若干触れなければならない。

保守陣営で最も早く結成に動いたのが日本自由党で、昭和二十年十一月九日に日比谷公会堂で結成大会を挙行した。総裁鳩山一郎、幹事長河野一郎で参加議員は四十三名だった。同党は立憲政友会本流の鳩山派に立憲民政党系の三木武吉を迎へ、翼賛選挙の非推薦議員が中心となつた。

これに遅れることわずか一週間、日本進歩党が二十年十一月十六日、丸ビル精養軒で結党式を行ふ。戦時中の翼賛議員の集まりだった大日本政治会を母体としていたが、民政党系（町田忠治派）、政友会系（中島知久平派）が主導権争いを演じ、総裁に町田忠治がようやく就任したのは十二月十八日になつてからだ。しかしこの町田が追放になり、二十一年四月、時の幣原喜重郎首相を迎えて同首相が第二代総裁となる。

日本協同党は二十年十二月十八日、協同組合主義を掲げる船田中らが中心になつて結成、委員長に雑誌「改造」の山本実彦を迎えた。しかし二十一年一月四日のG H Qの公職追放令で議員二十三名中二十一名が追放されて瓦解する。このため二十一年四月の第一回総選挙後の五月二十四日、無所属、小政党を糾合して協同民主党を結成、三木武夫はこの時參加した。この協同民主党は二十二年三月八日、笠森順造、早川崇らの国民党（二十一年九月二十五日結成）と合同して国民党となり、三木武夫は書記長に就任した。この国民党はのちに日本民主党に合流することになる。

しかし保守陣営再編の動きはまだまだ続く。

進歩党は結党以来、保守合同を主張していたが、自由党の吉田体制下（鳩山公職追放のあと）で不満をつのらせていた芦田均、国民協同党的林平馬らの参加を得て二十一年三月三十一日、民主党

同年四月二十五日、戦後二回目の総選挙（第二十三回衆院選挙）が行われるが、その直前の衆院各党の議席は次の通りである。

民主党一四五、日本自由党一四〇、日本社会党九八、国民協同党六三、日本共産党六、その他一三、欠員一。

四月の戦後はじめての総選挙は自由党が第一党となり、鳩山内閣誕生と思われたが、その寸前、鳩山が突然のページに会う。この鳩山のページは、裏で政治的謀略がめぐらされた結果だとの噂もあるが、このページでピンチヒッターとして吉田茂が内閣を組閣することになる。

第一次吉田内閣は、G H Qの指令に基づく民主化への制度改革と経済危機突破に取り組んだが、戦禍による国民経済の疲弊は著しかつた。国民は新円五百円での生活を強いられ、「タケノコ生活」（売り食い）の中で食糧不足と悪性インフレに悩まされた。このため労働運動は激化、日本労働組合総同盟、全日本産業別労働組合会議（産別会議）の結成を背景に、いわゆる十月攻勢を開いた。吉田首相は二十二年初頭のラジオ放送で、こうした労働運動の指導者を「不逞の輩」と非難し、政労の対決ムードは「二・一ゼネスト」へ向けて高まって行った。一方国会では野党三党（社会、協同民主、国民）による解散要求でピンチに立たされた吉田内閣は社会党との連立を策したが、これも失敗に終つた。

政党再編成のうねりや吉田内閣の連立工作失敗といった激動の中で、いよいよ「1・1ゼネスト」の日を迎える。

官公庁労働組合を中心とした労働側は、G H Qの労組育成策に悪乗りし、共産党の指導のもとに日々闘争をエスカレートさせていた。世情は騒然となり、組合指導者は二・一ストを革命への突破口と位置づけて、革命前夜を思わせるものがあった。

これに危機感を抱いたG H Qは一月三十一日「中止命令」を発した。これによって急進的労働運動は一挙に瓦解し、以後労働運動の中で急進路線は急速に衰退していく。マッカーサー元帥の中止命令を受けたゼネストの指揮者、全官公庁共闘議長・伊井弥四郎は涙ながらに、「ゼネストの中止、共闘解体」をラジオで訴えた。

が、このゼネスト中止によって、多くの人命と国家の危機が救われたことは間違いない。万一、ゼネストが行なわれていれば国鉄はストップし、その回復には一ヶ月近くかかったはずだといわれている。そうなれば食糧の供給は完全に止まり、都市部を中心に餓死者が続出、食糧暴動が発生する可能性も高かつた。

いや、これこそ共産党が狙っていた状況であった。共産党の徳田球一は、こうした事態を懸念する声に対し「氣の毒だが、われわれはその混乱の中でクーデターをやる」といい放ったといわれている。革命の前には飢餓はもちろん、人命も利用されるということだ。

再度挑戦

こうした世情騒然たる状況の中で、森山は再度選挙にチャレンジするため、栃木県に腰をすえて熱心な活動を続けていた。選挙民の間にもようやく森山の名前が定着し、「今度こそは」と徐々に自信を強めていた。ところが森山にとって大変な難しい事態が発生する。今までの大選挙区、連記制から中選挙区、単記制への選挙法の改正である。

選挙法改正案は与野党乱闘という事態の中で昭和二十一年三月三十一日に成立した。衆議院は同日解散、四月二十五日に総選挙が行なわれることになる。改正の結果、栃木県は全県一区だったものが一区と二区に分区されたが、これは森山にとって大きなダメージだった。

「僕は第一回の選挙のとき、県の北側、つまり宇都宮を中心とする一区から六割、足利を中心とする南側の二区から四割という割合いで票をとったのです。ところが二回目の選挙のとき、二つの選挙区に分かれちゃった。僕は一区を選んだのですが、これで陣営は体制がガタガタになつてね。結果二回目もだめだった。もつとも、第一回目のときに一区の人たちと知り合い、その後もずっとつき合っていたおかげで約三十年後の森山真弓の参議院選挙には、ずいぶん役立ちましたけどね」

この選挙での森山は一万九千七百十一票と、第一回目に北部でとった票より大幅に得票を伸ばしたもの、七位で落選、またも苦杯をなめた。

選挙結果は社会党が予想に反して百四十三議席を獲得（自由＝百二十一、民主＝百二十八）して

第一党となり、六月一日には社会、民主、国協三党の連立で片山内閣が誕生する。

社会党の第一党が確定したとき、社会党書記長の西尾末広は思わず「えらいこっちゃ」と叫んだ。このエピソードは社会党が政権担当の準備も心構えもなかつた」という。「思い込んだら命がけ」といった森山の面目躍如たるものがある。それどころか選挙区での手応えが確実に強まってきたという感触を肌で感じていたこともあるって、森山は一段とファイトを燃やした。

昭和二十三年二月十日、社会党内の左右両派の対立が原因で片山内閣が総辞職する。後継首班をめぐつて衆議院は芦田均を、参議院は吉田茂をそれぞれ指名するという異常事態となつたが、一ヶ月後の三月十日、民主、社会、国協の三党の連立が成つてようやく芦田中道政権が成立した。

一方、日本自由党はこの直後の三月十五日、民主党を不満として結成された民主クラブと共に民主自由党を結成、所属代議士百五十二名の第一党となつた。これが第一次保守合同ともいわれる。党首が総理大臣に就任し、与党となつた森山は運動にも一段と熱が入つた。だがそれもつかの間。

昭和電工の社長・日野原節三の商工省課長らへの贈賄問題に端を発した「昭和電工事件」が六月に発覚、芦田内閣はスタートそろそろ足元を大きく揺さぶられた。前農林次官・重政誠之、大蔵省主計局長・福田赳夫に続いて閣僚の一人、経済安定本部長官・栗栖赳夫や社会党の西尾前國務大臣らが次々に逮捕されて芦田内閣は十月七日、わずか七か月で総辞職に追い込まれる。芦田は民主党総裁も辞任。その後、十一月七日には芦田本人が逮捕されてしまうのである。

芦田内閣のあとには、民主自由党の幹事長・山崎猛を首班に推す動き（いわゆる山崎首班事件）などもあつたが、結局、総裁の吉田茂が首班に指名され、十月十四日に第二次吉田内閣が誕生する。

この第二次吉田内閣も発足から約二か月後の十二月二十三日、衆議院で内閣不信任案が可決されたために解散。第二十四回総選挙（戦後三回目）が翌二十四年一月二十三日に行われ民自党は二百六十四議席（解散時百五十二）を獲得した。

二度の失敗を乗り越えて

昭和電工事件は「三度目の正直」をめざす森山にとって、大きな痛手だった。

「三度目の選挙は昭和電工事件からまだあまり時間が経っていない時期だったでしょ。だから僕なんかも立会演説会で演壇に立つたときに『芦田はどうした』とか『いくらもらつたんだ』なんていうヤジが飛んできましてね。僕らの仲間も全国で、自由党（当時は民自党）の連中にずいぶんいじめられました」

が、悪罵の嵐の中、苦しい選挙を闘い抜いて森山はついに初の当選を果たす。得票数二万八千一百八十一票、堂々の第二位当選である。昭和電工事件が強く影響したためか、民主党の当選者はわずか六十九名（解散時九十名）という惨憺たる結果の中での初当選だった。二度の失敗にもめげず自分の政治信条を訴え続け、着実に支持者を増やしていくことがようやく実ったのである。

二度の落選を乗り越えて



右 投票日前日の読売新聞(栃木版)。立候補者一覧に森山。
左 初当選して3か月目の森山代議士(昭和24年5月5日)。

一向に気になさらず寝袋生活を続けられました。
昭和二十四年正月、三回目の選挙が始まりました。先生はトラックに乗つて毎日遊説をされましたが、帰つてくると目のまわりの眼鏡のあとだけが白く、あとはホコリで真っ黒。さつそくお風呂に入つていただきのですが、私の弟妹たちは先生が入つたあとはお湯がドロドロで入るのが嫌だといついていました。奮戦のかいあって見事に当選されたときはお赤飯を炊いて祝つたのです。父さんは我が子の勝ち戦さのように喜び、しばらくは興奮が家中を駆けめぐつておりました。大政治家・森山先生が寝袋生活で頑張り、初当選された記念すべき大谷石の事務所は我が家の中です」

選挙から一ヶ月もたたない二月十四日、民主党は民主自由党・吉田内閣への連立問題をめぐり分裂、森山は野党派に属したため、またまた茨の道を歩むことになる。この分裂問題は代議士一年生



初当選にわいた館野家玄関前の大谷石造りの別館。

「(二)度目の落選をした)ちょうどその頃我が家の玄関前にある大谷石造りの事務所は空襲で焼け出された毎日新聞の宇都宮支局が使っており、開票の時は支局の人達が森山先生の開票速報を知らせてくれ一喜一憂したもので。二十二年の二回目の選挙が終つて間もなく、毎日新聞は復興資材の配給を受け、江野町へ新築移転したので、空家になった事務所を森山先生にお使い頂くことにしました。秘書の小野沢さんが毎日通つてこられ、先生は宇都宮にくると、事務所の板の間に進駐軍の空氣蒲団を置き、寝袋に入つて寝ておられました。父は衆議院に立候補する人が寝袋ではありません。かわいそうだと再三家にきて泊るようすすめましたが、先生は“寝袋のほうが気楽ですから”と

この当時の森山の苦闘ぶりを「大谷資料館」社長で古くからの支持者である宇都宮市小幡町の館野斐雄はこう回想する。

「この当時の森山の苦闘ぶりを「大谷資料館」社

の森山に、政治の世界が持つ一種の異常性、この世界にしか通用しない独特の論理の存在といったものを、強烈に印象つけたようだ。

「(一)のとき民主党の総裁は犬養健で、幹事長が保利茂だった。分裂した二月十四日の議員総会の数日前(二月十日)、犬養さんが吉田首相と連立問題を話し合ったのです。ところがこの会談の途中で犬養さんがマッカーサーのところへ行つた。そして、そこに行つてゐる間に心がわりしたといつて連立を約束しちやつたのです。僕たち民主党の議員の多くは、選挙のとき自由党の連中に散々いじめられてきましたし、筋が通らないので、僕も含めて多くの人は「断じて連立すべきでない」と反対した。そこで賛否の投票をやることになったのです。結果は三十六対三十三で連立反対派が上回つた。当然三十六が勝つたはずなんですが、保利さんが突然「連立派が多数と認めます」と宣言してしまつた。政界の算術っていうのはおもしろいと思ったね。ま、それで野党になつたんだが、野党というのは虚しいし、つらいね。それなりに頑張つたんだが、かえつて憎らしい奴というので、自由党なんかから目をつけられたらしくて、二十七年の選挙はなんとか当選したけど、この選挙のときに選挙違反でやられましてね。次の「バカラ解散」(二十八年四月)ではまた落選。そして、三十年の「天の声解散」のとき、鳩山ブームもあつて復活したけど、三十三年の選挙でまたまた落選し、三十五年に再び復活して、ようやくそれからは順調に当選を重ねられるようになります。いまから考えるとよく続いたものですよ」

政界では「負けグセ」という表現を使う。何度も挑戦するが当選できない者、一度当選してもす

ぐに落選する者は結局、最後まで地盤が安定せず、政治家として大成しないといった意味で使われる言葉である。

しかし森山はこのジンクスを見事に破つた。落選の経験をした政治家は一種独特の臭味を持つといわれるが、森山は「いつまで経つてもボンボンのようだつた」(支持者)といふ。はじめて政治に挑戦した時そのままの熱情と政治哲学を持ち続け、最後までそれは変らなかつた。当選を重ねると、政界の裏街道にばかり精通してくる政治家が多いが、森山の正攻法の姿勢は一貫していた。政界では稀有な存在だったといえるだろう。森山自身も、「まあ、よくいえばロマンチストなんじやないですか」とこれを自認していた。

三度目の正直で国会に踊り出た森山はときに三十一歳。時代はマッカーサーの経済安定九原則に基づくドッジ・ラインが実施され、日本がようやく自立への道を歩もうとしはじめた頃である。